



平和の港・NPO法人山梨平和ミュージアム-石橋湛山記念館-

<http://ypm-japan.jp/>

「市民参加型の平和インキュベート（孵化）作業とまちづくり」

（株）ケービーケー久保田 代表取締役 久保田要

「予兆・出会い・発意（社会の為になりたい）・・・使命・・・志・・・」ヒトは何かの予兆を感じて動く。社会を覆う閉塞した深い霧を、建築や都市の社会病理として、多少でも取り除きたいと思っているのは、私だけではあるまい。いまや「政府行政か、市場か」の二者択一時代から、政府主導でも市場依存でもない、「業界も市民も」である総参加型の新たなアプローチが始まっている。そもそも内発される何か（直感による純粋な思い）に突き動かされ、自発のメカニズムにスイッチが入り、自ら動き働き出してくるものである。その思いを通わせる誰かと共有できる動きがボランティア活動となる。非営利（NPO）法人は、より多様な社会性に答えるべく、制度インフラ化されて10年余が経つ。いくつかの見直す問題を抱えているが、信頼を得る組織の認知（社会活動）として、すべてのジャンルに行き渡り始めている。今回はNPO法人山梨平和ミュージアム(YPM)・「石橋湛山記念館」の社会貢献活動の実績紹介することとしたい。さて、遡ること39年前、私が高校三年の春、安田講堂を卒業したての若き浅川保先生（現YPM理事長）が赴任されてきた。日本史の教諭であられた師は、歴史認識の尊さを理系であったわれわれの固い頭に吹き込まれた。そこでわれわれは純粋な眼差しと高い志に目覚めたのであった。後に建築を学び“建築家になる前に歴史家たれ”とウィトル・ウィウスの教書を建築史教授に進められ、場所と人の歴史の関わりの上で建築があることを素直に学べたのも師のおかげであった。

「平和の活動（交流、展示）～運営（設立資金の募金）」設立準備に際して「タマゴが先か・・・ニワトリが先か・・・」の議論は避けられない。運営のあり方として、私はソフト展開（平和の巡回展）の重要性を最重点に掲げてきた。往々にしてモノづくりが主体として摩り替わっていく事を恐れ、魂の入らない器づくりにだけはしたくなかったからである。市民参加型の運営を軌道にのせることや募金活動には約3年を要した。（財）東京戦災復興記念館などは永六輔、吉永小百合、小沢昭一等の呼びかけで1億円が集まったと聞く。地方の一都市ではそのまねは出来ない、地道な呼びかけ、熱意をどう伝えるか、産みの苦しみを十分味わった。総建設費3600万円を篤志家の1000万円を含め市民の募金で賄うことが出来たのは、平和に関しての活動母体の熱意や市民意識の高さと時局が備わったことによるものである。開館1年半で延べ2800余名の来館者、賛助会員327名となっている。



「参加型のプロセスプランニングと展示、平和を通しての社会的企業モデル」関わる人々とのワークショップは、手腕のみせどころである。個人がどう運営に関わるか、エスキースを重ねながら練り上げていくなか、「わたしの展示ブース」を設け、それぞれの個人の平和を願う意思を、直接メッセージや体験を展示できるコーナーとして創ることが提案された。そのことにより、「伝えたい戦争の記録・記憶を」という広範な市民の声を結集した民立民営の平和博物館としてのコンセプトが出来上がった。それはストック（展示内容）とフロー（書籍出版・体験ツアー）が循環しながらの運営を可能としたのであった。また地域の社会的企業（利潤追求のみでなく社会に貢献する目的の会社や組織）となつてほしい企業に、平和の市場マーケットを創出する事業として、実験的に呼びかけてみた。平和を唱えるほど臆病になる土壌での苦戦が続いているが、企業のもうひとつの使命として、モデル化としたいものである。



「一石橋湛山記念館一・平和の民間外交（平和の使者交流）・疎開体験ツアー」展示の中核は、「偉大な言論人石橋湛山」の常設展である。生まれは東京だが、山梨で育ち、甲府中学・早稲田大学を出て、東洋経済新報社の記者として、大日本主義に抗して平和・民権・自由主義の論陣を張り、戦後首相となった湛山の生涯と思想が、写真实物資料として展示されている。また元日航機機長の諸星寛夫さんの甲府空襲体験記は、甲府空爆に参加した元B29乗組員ローランド・ポールさんとの被害者と加害者という関係として、その後の平和の民間交流として価値ある展示をしている。甲府空襲の実相、戦略爆撃の系譜、甲府連隊の軌跡、学徒出陣等すべての展示は、地域の独自性を出す内容として、オリジナルの活動を通し、ここにしかない身の丈にあった本物の展示と体験交流を主としている。



「歴史的建造物を活かしたまちづくり（赤レンガ館の保存活動＝地域遺産を資産運営）」

展示枠を超えて町なかでは、かつて赤レンガ館（現山梨大学所有）の甲府連隊第49歩兵連隊糧秣庫の調査を担当した。追ってこの建物を市民（YPMのメンバー達と）による保存運動に関わってきた。後に文化庁に対し、学術的には耐震補強史として、また山梨大学の歴史的なアイデンティティを残せる貴重な資産として価値があるとして、保存改修事

業の要望書を策定した。もちろん保存するだけが目的ではなく、大学と市民の共有できる展示・運営のあり方としてのコンセプトを提案した。今では国の登録有形文化財に指定され、平和の象徴である歴史的建造物として活用し、多様に利用されている。

「都市政策のあり方（まちづくりと設計事務所の使命）」甲府の町は武田信玄以来の城下町である。また江戸幕府時代は徳川直轄地の居城として整備されてきた歴史の重層下にある。先の二次大戦では空爆を受け、甲府中心地の風景は1127人の犠牲とともに焼け野原と化した。戦後復興計画の名の下、都市計画は進められた。市民社会が熟成していくなか、地域文化とともに経営していく物差しは、いまだに育っていない。つまり都市計画は出来ても都市政策になっていない。地域経営する視点からの都市政策は、土地バブルの教訓をもって、土地は所有目的でなく、建築をして利用できて始めて価値が存在するとした。ヒトの生き様を引き継ぎ、本来から存在する誇りある都市の遺伝子を再生し、開かれた社会貢献組織としてまちづくり政策提言している。私たちは、際を超えて支えていく使命がある。



2階常設展示場



1階企画展示場